庚申塔（こうしんとう）

自然の家の尾根にある庚申塔

庚申塔のことを知るには、まず「庚申信仰」を知る必要があります。

庚申信仰は、中国の晋の時代（西暦２６５年～４２０年）、道教の思想から始まり、奈良時代（西暦７１０年～７９４年）の日本に伝わりました。

人の身体の中には三尸(さんし)という虫がいて、60日毎に巡ってくる庚申(かのえさる)の日に、人々が寝静まった夜、その虫が体内から出てきて天帝にその人の悪行を報告し、怒った天帝はその人を早死にさせてしまうのです。

ですから人々は庚申の日は寝ないで夜通し起きていて、三尸(さんし)が体内から抜け出さないようにしたのです。このとき一緒に過ごす人たちの集まりを「庚申講」といいます。最初は、その夜を厳かに過ごすのが習いでしたが、平安時代から「２ヶ月に一度の楽しい夜通しの宴会の日」となってしまい、娯楽の乏しかった時代、全国の村々に一気に広がっていきました。

そしてこの信仰は、60年に一度の庚申の年に庚申塔を建てることを原則としました。私たちが峠路などで見る庚申塔はこうして建てられたものなのです。

さて先程「60年に一度の庚申の年」と言いましたが、次回は2040年です。

21世紀の庚申塔とは一体どんなものになるのでしょうか。

群馬県立東毛青少年自然の家